

3 生活の安定と色々な経験が大切

人づくりは、最初の家庭でのしつけだと思います。それには、生活の基盤である雇用の安定が必要です。数年前にオーストラリアでは、好調な経済成長により出生率が上昇しました。しっかりした雇用を作り、生活を安定させることが、出生率の向上、ひいては家庭でのきっちりとしたしつけにつながると思います。

もう一つは、色々な経験をさせることです。組織では、各自それぞれの仕事をしているため、自分以外の人は何をしているかわからない状況ですが、これでは将来を支える人はつくりづらいと考えています。銀行でいえば、出向を左遷とらえがちですが、ある程度若い段階からどんどん出向させ経験を積ませることで組織全体にいかすことができます。学生のうちから、色々な社会勉強をさせることが人づくりに役立つのではないかと思います。

Taguchi Shintaro

田口信太郎氏

東邦銀行取締役、元NHK福島放送局長

2 物事の本質を知ることが大切

人生には、それぞれに段階があると思います。得意部門ができてはじめて、そこから登れるようになります。私は職人なので、経験や本で知識を得るなどして一つのことを突き詰めてきました。しかし、情報化社会で簡単に情報を入手できるせいか、結果に至る過程も知らずに自分の言葉のように話す人がいます。その真実を知らずに話してしまうのが問題です。物事に対して経験や調査をして、その本質を知ることが大切だと思います。

また、色々な部門の情報や動きを見極め統括できる人材の育成も必要だと思います。今、道徳や慣習を教える機会が少なくなっています。私は、各種の組合や総会の中で教わりましたが、これらを家庭で教えてみてはどうかと思っています。さらに、学校の授業や部活以外の場所で、道徳や慣習を教える機会があってもいいと思っています。

Nozaki Hiromitsu

野崎洋光氏

「分とく山」総料理長

5 まず自分で調べその中から学ぶことが大切

以前、中央中で講演を行った後、多くのメールが届くようになりました。メールは、個性と自由を重んじる教育のせいか、自由に自信に満ちていたものでした。中には作家を目指す人たちがいて、どうしたらなれるか聞かれました。私は、逆になぜ目指すのか尋ねると、個性を表現したいとのことでした。今、人と同じ事が恥ずかしい・違うことが正しいという考えを持つ人が多いですが、すべてにわたってその様な考え方がよいとは限りません。

また、どうやって暮らすのか尋ねると、多くの方が、親に面倒を見てもらうので大丈夫とのことでした。今の子どもは、何でも簡単に考える傾向があります。自分で事前に調べたり学んだりせずに初めから誰かに聞こうとします。何を指すにしても段取りを踏み、学ぶことが大切です。まず、そこから教えなくてはならないと感じています。

Kawase Nanao

川瀬七緒氏

第57回江戸川乱歩賞受賞作家

4 自分に自信を持つために郷土を知る学習を

未来を担う人に必要な資質は共通していると思います。郷土を担う、日本を担うといっても、自分に自信と誇りを持ってない人は絶対に担うことはできないと思います。自分に自信を持つてはじめて、郷土に自信と誇りを持つことができますので、それが正当なものならば狭いナショナリズムではなくグローバルで人の役に立つ人間が出てくると思います。

私は英語がしゃべれません。英語のたんのうな人は、知識を伸ばすためアメリカ等に留学や進学しますが、最後にどういった人が尊敬されるのか、それは英語を話せる人ではなく中身になります。自分を知り中身に自信と誇りを持つ原点は、郷土を知ることであり、白河の歴史を知ることだと思います。自身と誇りを形成するために、もう一度、郷土を知る授業を中学校等で行うとよいと思います。

Hitomi Nobuo

人見信男氏

㈱サン総合管理代表取締役社長、元警察庁交通局長・元警視庁副総監



▲懇談会に主席した「しらかわ大使」の皆さんと市長（浅井光昭氏は急用のため欠席）

未来を担う人づくり

2月13日、東京都内で「しらかわ大使懇談会」が開催されました。将来的な人口減少が危惧される中、持続的なまちをつくるためには、「人づくり」が最も重要な課題であることから、色々な経験を持つ大使の皆様にご意見をいただきました。今月号では、その内容を抜粋してお届けします。

1 共感力を増すための場を

私が日産に勤務していた時期にカルロスゴーンが社長に就任しました。日本からこれまで以上に海外に視野を向けるように変わる中、英語が話せない私が役員に選ばれました。グローバルな会議では、日本人は違和感無く議論をしますが、懇親会になると日本人同士で固まる傾向があります。私は逆で、片言の英語ですが積極的に話すよう心掛けました。その姿勢が評価され選ばれたと後になって分かりました。

これは共感力というもので、自分と異なるものに興味を持つことです。これを持てる人が、グローバルな人間

になります。例えば、1人の外国人を組織に入れると周りがそれに合わせ共感力が増します。これにより、間違いなくローカルとグローバルが合わさったグローバルな人が育つと思いますので、経験する場を作るべきだと考えます。

Toida kazuhiko

戸井田和彦氏

㈱ファルテック取締役社長、元日産自動車㈱常務執行役員